

21世紀の世界反帝闘争の精神的・道徳的指針を明示している 金日成主席の革命学説

ロシア・ロストフ金日成・金正日主義研究協会会長
ドミトリー・レミゾフ

21世紀の前半期である今日、世界人民の前には再び帝国主義の支配を肅清すべき課題が提起されています。この課題は20世紀末、世界の反動派が一時的に台頭して社会主义諸国が崩壊した事件があった後、新たに提起されました。新たな条件で反帝闘士たちは、帝国主義者たちを成功裏に撃退した20世紀の革命先輩の経験を研究しなければなりません。

革命家の間で特出した地位を占めるのは、朝鮮民主主義人民共和国の創建者である金日成主席です。

金日成主席は、北東アジアで帝国主義勢力を打ち破り、資本主義に反対する新たな段階の闘争に立ち上がっている進歩的人類のモデルである社会主义を打ち立てました。

金日成主席の革命歴史を研究すれば、21世紀に帝国主義を粉砕すべき任務を担った新しい世代の革命家の大部隊を組織する活動の助けとなるでしょう。

金日成主席の回顧録「世紀とともに」を通じて、1920年代に北東アジアで共産主義革命運動の原則がつくられていた初期の状況について、よく知ることができます。

金日成主席は回顧録にて「やってみようともせず、裏部屋でああだ、こうだと詮索するのは共産主義者らしくないやり方だ」と書いています。

この言葉は、私的所有に基づいた制度の衰退没落を悟り、資本主義に批判的な現代の青年たちにとって、極めて重要な意義をもちます。多くのインテリは、資本主義世界に対して懐疑的に思いながらも、残念ながら友人同士で、そしてインターネット上で対話を交わし、論争をすることにとどめています。このように狭い範囲での資本主義制度にたいする批判は、何の用にも立ちません。

諸問題の過程や趣旨、歴史発展の法則を知っているとしても、その知識を実践に適用しないならば、主にはその過程を正しく導こうと努力しないならば、何の必要があるのでしょうか。

裏部屋から飛び出て抗争と闘争の道に立つのが、共産主義者の人生です。

金日成主席は回顧録の中で、いったん、革命を志した人間は情におぼれ、脇見をすることなく、最後まで目的ひとすじに突き進まなければならぬと書いて

います。

革命闘争の道に立つと、もはや新しい人間になります。そういう人間は凡俗な生活と決別します。昨日は好感を与えていた人たちが、今日はバリケードの向こう側に立っているかも知れません。それは彼らが、階級の敵の側だからです。個人的な好感が革命と因縁がないならば、それを捨てなければならず、任意の人間にたいする観点は、彼が決戦の時にどの側に立つかを見て、もたなければなりません。

金日成主席は、いかに聰明で有能な人間も、長年社会活動から離れて家庭に埋もれていれば、思考能力が衰え、世事にうとくなり、人生観にも鏽がつくものであると述べています。

革命家は、休日や祝日にのみ革命をおこなうではありません。

革命家の一步一歩は、人類の解放のための闘争にささげられます。さらに自由のためにたたかう闘士は、日常生活を革命勝利の目的の上に置いて、私生活、家庭生活に埋もれてはいられません。家庭は、社会生活をする上で邪魔にならず、邪魔になつてもなりません。かつては闘士であったが、現在は俗物となって社会生活から離脱すれば、そういう人間にたいして同情心以外のいかなる他の感情も呼び起こすことができません。そういう人は、虫けらのような俗物になります。

人間であれば、そのような俗物となつてはなりません。

金日成主席は、革命家の一生は大衆のなかに入ることからはじまり、革命の失敗は人民大衆の力を信じず、人民大衆のなかに入らないことからはじまるといえると述べています。

革命家にとって自分を「蒙昧な大衆」と異なる特殊な存在として考えるのは、大きな誤りです。最初は前衛部隊が闘争に奮い立ち、その次には広範な大衆がついていくのが歴史発展の法則です。今日は事象の過程の本質を理解しなかつた人たちも、革命思想を受け入れれば明日は領袖の呼びかけに従って闘争に奮い立つようになります。

金日成主席は、つねに人民大衆の中におり、自国人民とともにありました。これが金日成主席の政治活動の成果を保証しました。

金日成主席は、革命の原動力を主に労働者、農民と規定していた従来の古い概念から脱して、青年学生たちも革命闘争で堂々とした主力をなすと新たに規定しました。

マルクスとレーニンが理論を展開していた時には、教育が「精銳教育」となっていました。19世紀から20世紀初めの間のロシアでは、平民出身はただ教会付属の小学校で数年間勉強することができただけです。ゆえに、レーニンが革命で

大学時代の果たす役割について何も書かなかったことは当然なことです。

20世紀に世界の情勢は変わりました。教育はより民主化され、平民出身の青年たちも大学で勉強をするようになりました。

金日成主席が青春時代を送った1920-1930年代には朝鮮でも、中国東北地方（そこには朝鮮人が密集して暮らしていました）でも変化が起こりました。

金日成主席は、学生青年たちを共産主義革命運動組織で重要な力量として見なしました。

青年前衛たちに依拠するというのは、決して前世代の闘争伝統を忘れることを意味するのではありません。むしろ前世代の経験は誤りを犯すことなくまっすぐに前進していくようにします。

新しい21世紀に、金日成主席の革命学説は、われわれに今後の世界反帝闘争の精神的・道徳的指針を与えています。各大陸で革命闘争の旗を再び掲げています。